

鴨東におけるキャンパス創造

—第三高等中学校、京都帝国大学、そして中川小十郎—

河島 一仁

第一章 はじめに

大正七年（一九一八）の大学令は、日本の大学を「帝国大学其ノ他官立ノモノ」と「公立又ハ私立」に分類している。この法律によって、京都では京都帝国大学のほかに、公立の京都府立医科大学、私立の同志社、龍谷、大谷、立命館なども大学となった。これらのうちで、筆者は京都帝国大学のキャンパスに関して歴史地理学的な考察を加えたことがある。^①複数の地図と歴史家・喜田貞吉の回想文をもとに、尾張藩の藩邸跡に第三高等中学校が移転し、その後京都帝国大学が立地したことを把握し、吉田・岡崎などを含む鴨東がどのような変貌を遂げたかを明らかにした。本稿は、叙上の成果をもとに、より精緻な議論をおこなうべく構想したものである。

第一に、尾張藩の吉田屋敷に関して絵図をもとに考察を加え、その実態と周辺地域との関係について明らかにする（第二章）。第二に、第三高等中学校の移転までの推移を踏まえて、新聞記事をもとに衣笠山麓が候補地であったことに言及する（第三章）。第三に、京都帝国大学のキャンパス創造に関わった書記官・中川小十郎の存在を確認し、彼が抜擢された理由を西園寺公望との関係をもとに考察する（第四章）。第四に、二人の京大教授の文章をもとに、第三高等中学校ならびに京都帝国大学の立地が、鴨東のみならず「塔之段」にも影響を

及ぼしていたことを析出する。

筆者は、「京都における大学の歴史地理」というテーマで複数の論文をすでに発表している。本稿はそれらに含まれる一編である。「鴨東」をタイトルの冒頭に掲げてはいるものの、対象地域は相国寺の東に位置する塔之段と衣笠山麓も含んでいる。さらに「大学の歴史地理」を標榜してはいるものの、幕末の藩邸から起筆し、後に第三高等学校と改称する第三高等中学校に関して論じているのは、本稿がいわゆる沿革史ではなく、地域の歴史的な変化を捉える歴史地理学の方法に基づいているからである。なお、書記官の中川小十郎を注視する理由は以下のとおりである。

京都帝国大学の書記官を二度も務めた中川が、同大学にどのような貢献をしたかについて具体的に論じる用意は、本稿ではまだできていない。それはともかく、中川が書記官として、そして学校経営者として、京都の三つの地域に関わった事実を、「京都における大学の歴史地理」に位置付けるべきと筆者は考えている。第一に鴨東の吉田、第二に京都御所近傍の河原町広小路、第三に衣笠山麓の等持院北町である。彼は河原町広小路で立命館大学を創出し、等持院北町で立命館日満高等工科学学校を発足させた。すなわち、中川の足跡を京都の三カ所で確認できるのである。京都の学校経営者で、このような事例はおそらく中川だけであろう。ちなみに主としてアメリカン・ボードからの

資金をもとに、土地の買収に積極的であった新島襄が確保したのは、京都御苑縁辺と旧彦根藩邸跡にはほぼ限定される。面積の広狭は別にし、新島とともに中川を近代京都の空間編成におけるアクターの一人として位置付けることを筆者は目論んでいるが、本稿ではまだそれを果たし得ない。

第二章 尾張藩の吉田屋敷

第一節 京都の藩邸

鎌田道隆氏によると、京都における藩邸の数は、一七世紀の前半には六八、一七世紀末で八三、幕末の元治元年（一八六四）には六〇、同年の別の絵図では七三、そして慶応四年（一八六八）には七四に達していた。^②

享保二年（一七一七）ごろに作成された『京都御役所向大概覚書』^③の「京都大名屋鋪・拝領地并買得屋鋪之事」には、「拝領買得屋鋪数合九十六ヶ所」が列記されている。^④この史料は尾張藩の藩邸に関して「錦小路通新町東江入町」と記し、「買得茶屋長會名代」と書き添えている。尾張藩の御用商人である茶屋家が、藩の名代で購入したのであった。この藩邸は錦小路に面していた。

文久三年（一八六三）における藩邸に関して、『京都の歴史 七』^⑤の「図九四 上洛諸大名本陣所在図」が示している。この題は図の作成者が命名したもので、キャプションに明記されているように『東西紀聞 第一』^⑥に綴じ込まれた「方角略図」を基にしている。「方角略図」は文久三年に三条通柳馬場の堺屋直七が発行したもので、題は「御旅館・御屋敷 方角略図」で、凡例には「御旅館」の〇と「御屋敷」の▲が並記されている。この場合の「御旅館」とは、上洛した大名が宿

泊する寺院や公家の屋敷であり、「御屋敷」とは藩邸である。「御屋敷」の数は都合三五であった。

第二節 吉田屋敷の地理的実態

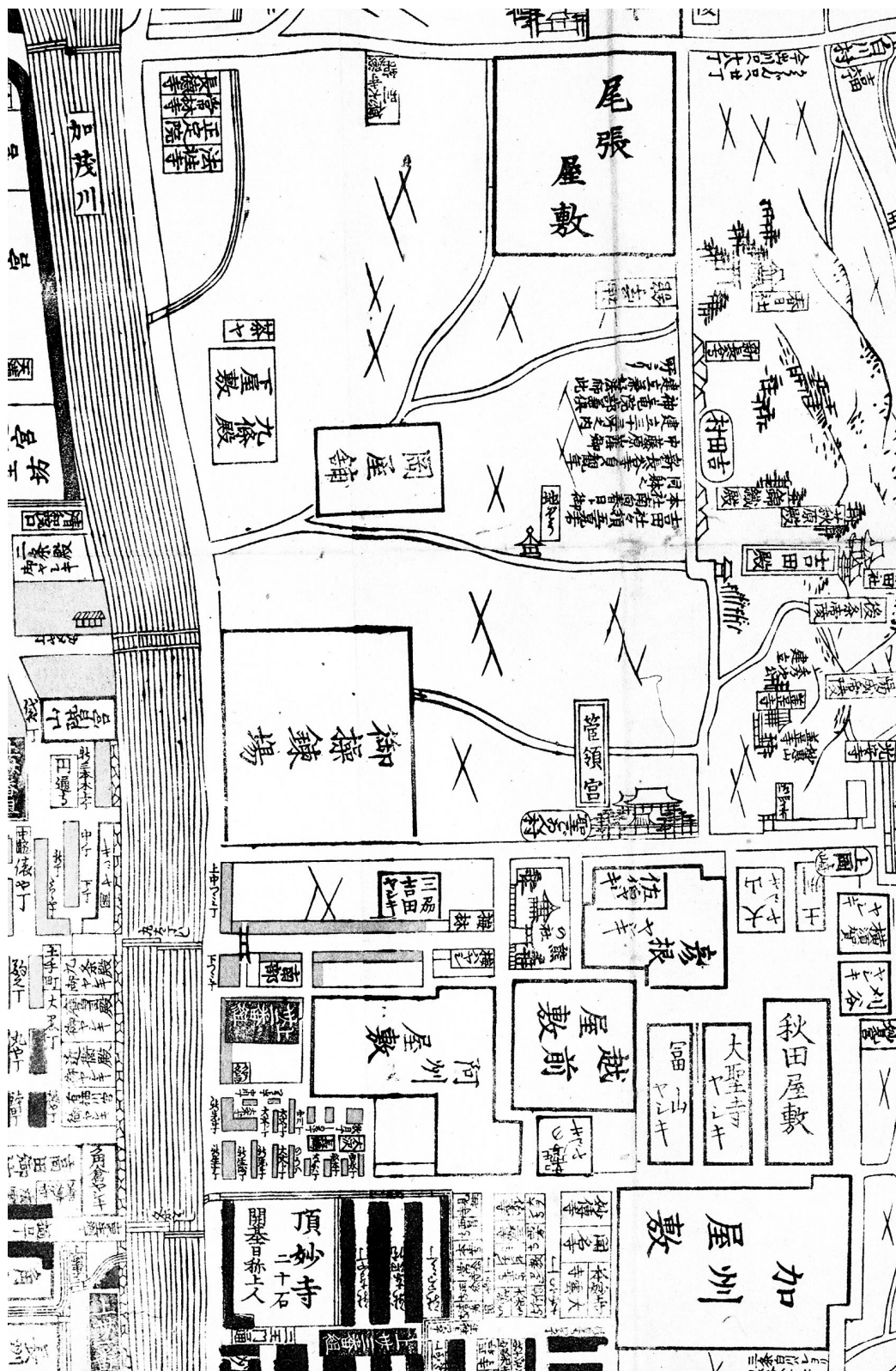
尾張藩は鴨東で新たに藩邸「吉田屋敷」を創出した。後藤真一氏によると、吉田「屋敷」の設置は文久三（一八六三）年末で、吉田村に貳万坪程の土地を、尾州茶屋家を名代として購入し^⑦た。吉田屋敷は、伏見に設けた藩邸と同様に、「居所としての機能を持つ」っていた、と同氏は指摘している。

図1は、明治二年（一八六九）の「京町御絵図」^⑧の一部で、その北東部に位置する「尾張屋敷」が文久三年にできた吉田屋敷である。文久三年の「御旅館・御屋敷 方角略図」では鴨東に位置していた藩邸は阿波藩のものだけであったが、明治二年の図1では、「尾張屋敷」のほかにも「加州屋敷」、「秋田屋敷」、「大聖寺ヤシキ」、「富山ヤシキ」、「越前屋敷」、「彦根ヤシキ」などもできている。

藩邸のほか、吉田神道を率いた「吉田殿」とともに、「吉田村」の屋並みと「白川村」も記載されている。

「賀茂川」には四本の橋がかかっている。北から順にみていくと、おそらく現在の今出川通にかかる加茂大橋に比較的近い橋、荒神橋、丸太町橋、二條橋などである。よく見ると三つの橋は川の中程で板橋が食い違うように描かれているが、荒神橋の場合、欄干しか描かれていない。欄干だけの橋はあり得ないが、荒神橋は他の三つの橋とは明らかに異なっていたのであろう。^⑨

荒神橋を渡り、東岸を北上すると東に曲がる道がある。そこを進行で行くと、道は二方向に分岐するが、北側の道を行けば「岡屋鋪」がある。岡藩は豊後にあった小藩である。この絵図では、「岡屋鋪」が



「京都御絵図」、御用書林村上勘兵衛刊、明治二巳年御改正、木版彩色刷、明治2年(1869)。

出典：『慶長 昭和 京都地図集成 1611（慶長16）年～1940（昭和15）年』、柏書房、1994。

注：この図を、次の拙稿中ですでに使用している。（河島一仁「京都における大学の歴

—京都御所の周辺地域における変化—」、立命館文学、第645号、2016、221頁。）

[illegible]

道に被さるように描かれているが、おそらく道に面していたのであろう。やがて道はまた二つに分かれる。西側の道は「尾張屋敷」の南西端にぶつかる。ここまでの道は「白川道」と呼ばれているようである。この道は本来は東北方向に直進して白川村につながっていた。それゆえに「白川道」という名称が生まれていた。しかし、「新たに建設されたこの尾張藩屋敷によって、荒神橋から白川村へと斜めに走る古くからの白川道が遮断されてしまった」¹⁰のである。それは文久三年のことであった。

図1の北東隅にある「白川村」の西に「かうじん口へ廿丁、今出川口へ十八丁」と書かれている。つまり、白川村から荒神口までが約二・一キロメートル、今出川口までは約一・九キロメートルの距離であった。今出川口までは西方にのびる道を進むことになる。他方、荒神口に行くには「尾張屋敷」の東縁を南下し、西に折れて荒神橋に向かうことになった。

吉田屋敷の二枚の絵図が、名古屋市蓬左文庫に所蔵されている。同文庫の資料番号にもとづいて、本稿でも九四五と九四六という番号で叙述することにする。¹¹両絵図はいずれも「吉田御屋敷惣図」と呼ばれているが、サイズは微妙に異なる。九四五のそれは南北が一六・六センチメートルで、東西が八四・八センチメートルである。他方、九四六のそれは南北が一四センチメートルで、東西が八二・四センチメートルである。同じ地理的範囲を表現する絵図ではあるが、九四六のほうがわずかに小さい。

九四六を見ると、四周には「土居」と「カラ堀」が設けられている。土居には「土居上矢来」とあるので、土盛で周囲を囲み、その上に「矢来」が設置されて、外敵に備えていた。東西南北に出入口があり、そのうちの「南御門」が正面である。

敷地内を水路が流れている。東門から敷地内に入ったあたりで、この水路には「水車」が位置していた。

敷地の中で、「御座所」が、もつとも最高位の人物がいるところであろう。その周囲に、藩兵が起居した一六棟の「御長屋」が配されている。そのうちで、北寄りの一棟のみが二階建てであった。敷地の北端部には、藩兵の調練をおこなう「練武場」が位置していた。

蓬左文庫によると、九四五は九四六の写しである可能性がある。おそらくその根拠は、外郭部の表現が、九四五の方がいささか簡便であることによると推測される。九四六では、「土居上矢来」と「カラ堀」とが表記されていたが、九四五ではその区別はなく、「カラ堀」とだけ記されている。これは、「土居上矢来」が無くなったのではなく、単に記載が略されただけかと思われる。

尾張藩の「京都買物奉行」という役職が置かれていた錦小路の屋敷は、明治三年（一八七〇）に廃止された。¹²そして南面していた吉田屋敷は、明治四年（一八七二）に処分された。¹³

第三節 白川街道と山中越

「白川道」は、「白川街道」とも呼ばれていた。「皇国地誌」編纂の基礎資料であり、明治八、九年頃の村レベルの地誌が収録された『京都府地誌』¹⁴で吉田村の道路の記載をみると、「白川街道」北白川村界ヨリ来り賀茂川堤二至ル長サ十三町余幅三間（傍線は筆者による。以下同様。）とある。この道の名称は「白川街道」で、吉田村と北白川村の村界から「賀茂川」の堤防まで続き、長さは約一・四キロ、道幅は約五・四メートルであった。この箇所には「北白川村」とあるが、『京都府地誌』では「白川村」として立項されている。また、これには「賀茂川」と記されているが、現在では「鴨川」と表記される。

明治四年に「尾張屋敷」が処分され、『京都府地誌』が明治八、九年のものであれば、「長サ十三町余」という「白川街道」はいつの状態を示しているのであらうか。第一に「尾張屋敷」ができる以前で、吉田村の村落領域を斜めに通った道、第二に「尾張屋敷」ができて以降に迂回を余儀なくされてからの道、のいずれかと解される。明確なことはわからないが、「尾張屋敷」を示す図1では「かうじん口へ廿丁」あることを勘案すると、七町も短い「十三町」は第一の道かもしれないが判断は留保する。

『京都府地誌』では白川村の道路に関して、「山中越 俗琵琶街道ト呼フ、近江国琵琶湖二通スルナリ。村ノ中央二通ス、東方近江国山中村界ヨリ西本郡田中村界二達ス」と記している。道の名称は「山中越」であり、近江国の山中村との境界から白川村に西接する田中村との境界までをそう呼んでいた。

山中越に関して吉田村での言及はないが、荒神橋東詰から鴨川の東岸を経て、吉田村の村落領域を斜めに抜けて白川村の村落領域に入り、田中村からの道と合流して、「村ノ中央」を通じて山中村に入っていく道があった。近江の山中村との境界から荒神橋に至るこの道は、戦略上の重要性を有していたと想定される。吉田屋敷が道を取り込み、交通を遮断するような位置を選択していることも、それを示唆しているのかもしれない。

『京都府地誌』によると、白川村は男性七四七人、女性八六一人を擁していた。男性には農業のほか石工が一二〇戸、水車精米を業とする者が八〇戸あり、「花ヲ鬻グ者」すなわち白川女が一〇〇人もいた。彼女らは、本来的には白川街道を通って荒神橋に達したのであらう。吉田屋敷ができたので、致し方なく遠回りをするようになった。

第三章 第三高等中学校の立地

第一節 大阪から京都への移転

第三高等中学校の沿革は次のとおりである。「明治二年に舎密局が開設され、洋学校が設けられた。その後、洋学校の名称、組織や所管はしばしば改められた。開成所、第四大学区第一番中学、開明学校、大坂外国語学校、大坂英語学校などである。明治二二（一八七九）年四月に大坂専門学校となるが、翌明治一三年十二月に文部省直轄の大坂中学校となった。（中略）明治一八年、大阪中学校は大学分校となる。これは将来大学にすることを含みとしたものであったが、翌明治一九（一八八六）年の中学校令の制定、公布により第三高等中学校となった。」¹⁵

明治一九年二月二日の大阪朝日新聞には「大学分校の新敷地」という見出しに続いて、次の文がある。¹⁶「同校在来の屋舎が狭隘なるに付、他に新敷地を撰びて之を建築せんと議あり、且新敷地は伏見の桃山に於いて撰定せらるゝならんとの説ある趣は、客冬旧校長折田彦氏上京のとき已に報道せしが、右桃山に於て敷地撰定の事はその後見合せとなり、此度更に東成郡天王寺村茶臼山の南七万余坪を其敷地となす事になりて桜井郡長の下検分も已にすみたるに依り、同村戸長は昨日其地坪及び地価を記せし書面に地図を添へて其筋へ差し出したりとの事なり。」¹⁷伏見の桃山が候補地となったが、理由は不明ながら見合わせとなった。その後東成郡天王寺村茶臼山の南が候補地となった。郡役所との折衝も進められたのであらう。

明治一九年十月十日の同紙には、次の記事がある。「第三高等中学校は大坂府下に置かるる制定なるも、同府下は教育に適當せざるの地形なれば、之を改めて京都府下に置かるゝことに内決ありて、その筋

より同校に適當の地形を取調べらるゝ都合にて、這是葛野郡谷口村小松原村等持院村等の内にて、七万余坪の地を撰み、之が設立地に充つるこそ適當なれと当府庁に於て見込まれ、目下其地形等の調査中なる由¹⁸⁾と述べている。

大阪府での選定を断念し、京都府葛野郡で探すことになった。その理由として、「同府下は教育に適當せざるの地形」と述べている。その結果、候補地となつたのは衣笠山麓に位置する「葛野郡谷口村小松原村等持院村等の内」である。これらの三つの村は、明治二年の市制町村制施行以前の村、すなわち藩政村であり、これらの村落領域は連接している。竜安寺を村落領域に含む谷口村が西端で、その東に等持院を村落領域に擁する等持院村、そしてさらにその東に小松原村が位置している。第三高等中学校は適地の撰定にあたつて、京都府庁からも情報を得ていたのであろう。そしてさらに精査が進められ、「七万余坪」の土地をどのように確保するかが検討された。

明治二〇年一月五日の同紙は、「夫の葛野郡谷口村等持院村村内に定めらるゝ筈なりし第三高等中学校の位置は、旧臘二十七日、森文部大臣の見分ありたる末、更に愛宕郡吉田村旧名古屋藩邸の跡と定められ、其建築工事も本年四月上旬と内決せられたるよしなり¹⁹⁾と報じている。明治一九年一〇月ころには、衣笠山麓の三カ村が候補地であつたが、同年十二月二十七日、森有礼文部大臣の「見分」すなわち視察の結果、「愛宕郡吉田村旧名古屋藩邸の跡」に移転することが決定し、工事の日程も明示された。歳末のぎりぎりの時点でのこの決定が下されたのであつた。

森有礼は、衣笠山麓と「愛宕郡吉田村旧名古屋藩邸の跡」の双方を視察したのであろうか。文部大臣の責務として後者には実際に訪れたにちがいない。前者に行つたか否かはさだかではないが、ここは薩摩

藩と強く関わる地域であつたので、ともに薩摩藩出身の森有礼と校長の折田彦市は熟知していたのではないか²⁰⁾。さらにあえて付言すれば、等持院村の村落領域の北部が現在の等持院北町であり、そこに現在、立命館大学衣笠キャンパスが位置している。もし第三高等中学校がこの地にきていれば、立命館は立地できなかった。

衣笠山麓ではなく「愛宕郡吉田村旧名古屋藩邸の跡」がなぜ選択されたのか。これは時の京都府知事であつた北垣國道の判断であるとい般に言われている。彼は鴨川の東岸、すなわち鴨東の開発を強く主張していた。琵琶湖疏水の建設、水力発電の推進、道路の拡張などを実現した北垣は、近代京都の空間編成を構想し、第三高等中学校の誘致がその実現につながることを見通していたに違いない。衣笠山麓は、彼の視野に入っていなかったのではないか。

第二節 第三高等中学校のキャンパス

『京都大学百年史 総説編』は、第三高等中学校の移転に関して詳細に叙述している²¹⁾。まず、移転先の候補地は複数あつた。一つは、「葛野郡宇多野の谷口村を中心に、西は仁和寺、南は花園妙心寺、北は等持院にまたがる七万五千坪の地、第二に愛宕郡紫竹大門村のうち、大徳寺の南から船岡山建勲神社の北にいたる地、そして第三に愛宕郡吉田村のうち、吉田神楽岡の西方、旧尾張藩屋敷跡、であ」つた。要するに、衣笠山麓では「葛野郡谷口村小松原村等持院村等の内」にとどまらず、西は仁和寺、南は花園村などを含む、より広い地域を候補地として想定していたようである。

第二に、「谷口村や大徳寺船岡山は水質に難点がある」とされ、吉田村には、「水質良純なるうへ、東の方の吉田山を除く三方は皆田野にして、遙か西に賀茂川をひかえ、北に百万遍知恩寺ありて至極の清

地」という評価が与えられた。

第三に、「第三高等中学校の敷地は、尾張藩屋敷跡の矩形の敷地で、四万九五七〇坪という広大な面積をもっていた。西側の敷地境界線の形は、第三高等中学校を経て、京都大学に受け継がれた。衣笠山麓では七万五千坪を構想していたが、尾張藩屋敷跡はその七割弱の面積であった。

第四に、「明治二〇（一八八七）年四月末には愛宕郡役所を通じて田畑の買い上げが始まり、六月一日には早くも着工の運びとなっているが、この間、かなり強引な土地の収用が行われたものである」と記されている。この記述をもとにすると、尾張藩吉田屋敷が明治四年に廃止されて後に、明治二〇年ころには同敷地は農地に戻っていたのかもしれない。吉田屋敷に取り込まれた白川街道が、もとの経路にもどることはなかったであろうか。吉田屋敷がなくなったあと、田畑にもどったとしても、屋敷の範囲がどこまでであったかはおそらく容易に見てとれたのかもしれない。というのも、吉田屋敷の建物が部分的に残存していた可能性が指摘されているからである。

京都大学総合博物館が令和四年（二〇二二）に開催した特別展「埋もれた古道を探る」のリーフレットは、国文学者の佐々政一の随筆をもとに、「注目すべきは、尾張藩邸の建物はほとんど取り壊されていたが、西南隅に残存する建物は藩邸に由来すると考えていることである」と指摘している。佐々は「維新前には村内に尾藩の留守居役屋敷あり、そが西端は今の学校の界と同じけれど、東は今の吉田町を一直線に化学教場の中央を通して北方百万遍に出づる道路ありしが、是が堺なりしとぞ我が物覚ゆる程の年にいたりし頃ははやく取壊ちて、今の校の西南の隅に唯茅屋一軒のみ立てり」と書いている。吉田屋敷の「西端は今の学校の界と同じ」であるが、東の界は第三高等学校の

それよりも西に位置していた。化学教場のあるあたりに北に向かう直線的な道があったのである。吉田屋敷のほとんどの建物は取り壊されていたが、西南の隅に「茅屋」すなわち茅葺きの建物が一つだけ残っていた、ということであろう。なお、第三高等中学校は、明治二十七年（一八九四）に高等学校令により、「第三高等学校」に改称した。

『京都大学百年史 総説編』によると、第三高等学校では、「明治二六（一八九三）年には敷地の南辺中央より少し西より、吉田神社参道に向かつて正門が開かれた」のであった。²⁴そしてそれに関連して、「多くの建築が南面しており、正面性が強調されていた」た。「第三高等中学校は、広大な敷地に対して施設全体を南側に寄せて配置していた。これは、設立当時から大学昇格を念頭において、拡充用の土地を確保するためであったという」と説明している。そして「本校は、（中略）南を正面として建設された」と明記している。

宮本雅明氏の『日本の大学キャンパス成立史』によると、敷地の南端部に煉瓦造の本館が位置している。これは教室棟であった。五つの高等学校のうちで本館に教室のみを置くのは、第三高等学校と熊本²⁵の第五高等学校だけであった。

第三高等学校は、敷地及び校舎を京都帝国大学に譲渡し、南隣に移転する。

第四章 京都帝国大学の創設

第一節 書記官・中川小十郎

明治二十七年十月から二十九年九月まで文部大臣を務めた西園寺公望のもとで、京都帝国大学創立の具体案が検討された。²⁶西園寺は、次官牧野伸顕、専門学務局長木下広次、会計課長永田久一郎、第三高等学校

長折田彦市の四名を新大学創設委員とし、大学新設に関する基本事項の審議を命じた。²⁷⁾ 明治二八年に作成された「清国賠償金ノ一部ヲ東京及京都ノ帝国大学基本金トシテ交付セラレンコトヲ請フノ議」(牧野文書)に次の箇所がある。²⁸⁾

「京都第三高等学校ヲ拡張シテ京都帝国大学と為シ、法医工文理ノ五分科大学ヲ置クモノトシ、漸次各分科大学ノ設備ヲ整へ、以テ東京ノ帝国大学ト対立セシメ関西最高教育ノ府ニ充テントス」²⁹⁾

要するに、第三高等学校の敷地を広げて後に、そこを京都帝国大学とする。第三高等学校は敷地を京都帝国大学に譲って移転するのである。京都帝国大学は法医工文理ノ五分科を擁し、東京帝国大学と対抗し、関西最高教育の府とする、という趣旨である。なお、京都帝国大学の創設には清国からの賠償金は使われていない。³⁰⁾

西園寺が文部大臣になった明治二七年の前年の七月に、文部省に入省し、専門学術局に配属された中川小十郎という若い官僚がいた。中川は京都府出身で、第一高等中学校を経て明治二六(一八九三)年に東京帝国大学法科大学政治学科を卒業している。彼は、木下広次とは師弟関係にあった。明治二八年八月に、中川は西園寺文部大臣の秘書官に抜擢された。この人事には、西園寺公望が慶応四年に山陰道鎮撫総督として、丹波国桑田郡馬路村に着いて以降の、中川氏一族との関係が作用している。³¹⁾

明治三〇年(一八九七)六月一八日の勅令第二〇九号の第一条には、「京都二帝国大学ヲ置キ京都帝国大学ト称ス」とある。その時の内閣総理大臣は松方正義で、文部大臣は蜂須賀茂韶であった。³²⁾ 同月二八日、「文部省専門学務局長木下広次が総長に、文部省参事官中川小十郎」が書記官に任命された。³³⁾ 「創立当時の官制定員」は、「職員 総長一人、書記官一人、舎監一人、書記一人、教授五十七人、助教授十六

人、助手二十八人」であった。³⁴⁾

明治三十一年(一八九八)一月十四日、第三次伊藤内閣でふたたび文部大臣となった西園寺が、中川を京都から呼び戻した。中川は、二度目の文部大臣秘書官となったのである。しかし、同年四月三〇日、西園寺の病氣辞任にともなって中川は退官し、実業界に転身した。³⁵⁾ 明治三十三年(一九〇〇)に、中川は京都法政学校(のちの立命館大学)を創立する。

明治三五年(一九〇三)、中川は再び京都帝国大学の書記官に任命された。その事情は明らかではないが、その後、約三年間、書記官として勤務し、明治三九年(一九〇六)、第一次西園寺内閣の成立にともない首相秘書官に就任する。そして内閣総辞職の後、樺太庁、台湾銀行を経て京都に定住するに至る。³⁶⁾

第二節 西園寺公望と中川小十郎

文部大臣の西園寺公望が、若い中川小十郎を秘書官になぜ抜擢したのか。このことに関して、慶応四年、山陰道鎮撫総督の西園寺と、彼に仕えた中川一族との関係で説明できる。その詳細に触れる前に、先学の諸研究をもとに、丹波国桑田郡馬路村に居住した郷士について整理しよう。

由緒によると、中川一族は清和源氏新羅三郎第五男子中川刑部太夫を祖とし、美濃国安八郡からこの地に室町時代末までに移住していた。足利義輝や義昭とも関わりがあったことも記録されている。馬路村には、中川一族よりも早く、鎌倉時代末以前に人見一族が移住してきていた。人見一族は、橘諸兄に始まるという由緒を有している。人見と中川の両姓の人々は婚姻を通じて血縁的な結合を維持し、自分たちを「両苗」と呼んでいた。両苗は近世には馬路村における在地土豪

であり、名字帯刀の郷士集団仲間で、地侍として領主的支配を行っていた。

馬路村は元和年間から元禄一年まで幕府直領で、その後、明治維新まで旗本の杉浦氏の知行地であった。宝暦十三年（一七六三）には人見姓は二二名、中川姓は一七名を数えた。³⁷⁾

明和二年（一七六五）の馬路村の総石高は八三四石あまりで、人口は一九六人であった。それらのうちで、総石高の約七割を両苗の六三人が有していた。つまり、この村の上層部を両苗が独占していたことになる。この村には四つの階層が存在した。人見・中川の両苗郷士、小百姓、両苗から家来と見なされる八三家の中間小百姓、そして水呑小者である。家来とは、他地域から来た両苗に隷属を余儀なくされた草分百姓であると見なされる。³⁸⁾

嘉永六年（一八五三）にペリーが来航した。それに対して、幕府は幕府領の代官支配地や旗本知行地における郷士を江戸に呼び寄せ、周辺の守備をさせることにした。杉浦氏の命を受けて、馬路村の両苗の郷士は、丹波における杉浦氏の支配地に住む他の郷士とともに、都合三回江戸に出向いている。その期間と人数についてみると、嘉永七年（一八五四）二月一九日から五月一日までが五〇名、安政二年（一八五五）七月二三日から九月二五日までが三〇名であった。文久三年（一八六三）には人数は不明ながら五〇日以上滞在した。

このような行動に関して。岡本幸雄氏は「尊王のための攘夷の精神に支えられたもの」と指摘している。中川小十郎の実父・中川禄左衛門は三回すべてに参加した。つまり、彼は尊王攘夷を強く意識する郷士であった。

元治元年（一八六四）、「禁門の変にさいして、馬路両苗郷士らは大挙六十余命の武装をもって『大御所御伺』と称し二条城に赴いた」の

であった。長州征討の朝令にもとづいて、彼らは京都に向かったのであるが、直接的な戦闘には参加しなかった。なお、「大御所御伺」とは禁衛を意味する。³⁹⁾

その後に薩長が同盟し、戊辰戦争となる。慶応四年正月三日、旧幕軍と薩長軍の交戦が始まった。戦いの帰趨は読めず、旧幕軍が優勢となった場合に備えて、天皇が山陰道から長州に出ることが企図された。しかし戦いは薩長軍の優勢で終わったので、山陰道を退路として確保することに関していったん取りやめになったが、西園寺公望があらためて山陰道鎮撫総督に任じられた。⁴⁰⁾

これには岩倉具視の判断が働いている。「正月四日征討大將軍嘉彰親王進發スルヲ以テ西園寺公望ヲ山陰道鎮撫總督ト為シ、本道諸藩ノ嚮背ヲ問ハシメ、緩急事ニ從ハシム。蓋シ具視力前キニ西郷吉之助等ト籌画スル所ノ策中ノ一ナリ。五日、公望薩摩長門二藩ノ兵各一小隊ヲ率イ京都ヲ發ス。間道ニ由リ山城国葛野水尾村ヲ經テ丹波国桑田郡馬路村ニ至ル。乃チ郷士人見龍之進中川武平太ヲ招諭シ人見中川ノ二族ヲシテ本営ヲ辨備セシメ陣ヲ此ニ駐ム。」⁴¹⁾

官軍の征討大將軍である嘉彰親王の進發に際して、西園寺公望を「山陰道鎮撫總督」に任命し、山陰道沿いの諸藩に官軍の味方になるのか背くのかを問わせる。これは岩倉だけで決めたわけではなく、西郷隆盛らとの協議にもとづいていた。公望には薩長の兵士二個小隊が付き従った。京都からは山陰道ではなく、「間道」を通じて丹波に入り、「馬路村」に到着した。両苗の「人見龍之進」と「中川武平太」だけの氏名しか記載されていないが、両苗の一同が公望を出迎えたのであろう。官軍から両苗には事前の連絡があったことは言うまでもない。中川武平太は中川禄左衛門の弟で、小十郎の養父である。

両苗は他の郷士に対して、西園寺公望に随従することを呼びかけ

た。その結果、船井・桑田両郡から二百余名の郷士が集まった。彼らは「弓箭組」と呼ばれた。⁴²⁾「人見龍之進、中川祿左衛門は両苗郷士総代として両苗郷士七十余名の指揮統制にあたるとともに」、⁴³⁾弓箭組の全体に関しても重要な役割を担った。この人々は「丹波、但馬、因幡、伯耆、出雲を巡歴し兵庫、大阪の行程を経て三月二十八日の京都帰還に至る約八十日間、西園寺に随行した」のであった。その後「西園寺が東山道第二軍総督に任ぜられるや両苗郷士は再び北越・奥羽征討にも参加した」のであった。西園寺公望が中川小十郎を抜擢したのは、両苗の人々とのこのようなつながりがあったからである。これが西園寺と小十郎とのいわば主従関係につながっていく。

第五章 キャンパスの形成による地域の変化

第一節 阪口昂の回想

第三高等中学校の尾張藩吉田屋敷跡への移転と、その後の京都帝国大学の創設は、周辺の地域にも変化をもたらした。

昭和三年（一九二八）刊行の『京とところどころ』⁴⁴⁾にある京都帝国大学教授の阪口昂（一八七二―一九二八）の回想をもとに、地域の変化について把握しよう。

阪口昂は、「明治四十年四月分科大学助教教授、同四十五年一月教授に任ぜられて史学地理学第三講座を担当した。爾来昭和三年一月逝去に至るまで、普通講義として西洋史概説を講ずると共に、特殊講義としては或は「ヘレニズムを中心とする古代史、神聖ローマ帝国史、ルネサンス時代史、晩年にはもっぱら一九世紀ドイツ史学史の研究に力を尽くした。」「誠に大正・昭和にかけての本邦史学界の巨擘であった。」⁴⁵⁾

【阪口昂（抜粋）⁴⁶⁾

平安神宮の前うしろ

岡崎、吉田は畑

その開けた第一歩は疏水

つぎが平安神宮と博覧会

私の京都居住は書生時代をいれると殆ど四十年になる。その最も多くを岡崎聖護院方面で暮した。当時今の森柝楼は名の如く熊野神社の鬱蒼たる森の中にあつた独立家屋の寂しい料理屋でした。会費四十銭か五十銭かで、今は時めく豪傑、当年の第三高等中学校の書生らがよく宴会をやった所です。お辰稲荷は田圃の中で、東西のあぜ路が十字を成している辻に、しょんぼり立った小さい祠でした。なぜなら本通りは今もなおある聖護院名物の八ッ橋屋の前から黒谷へと通つて居ただけで、しかもその本通りがところどころ家並がぎれて歯抜けの状態であつた。大学病院前の辺りは全くなすやかぼちゃ畑でした。何しろ明治廿二年に第三高等中学校が大阪から今の大学本部のところに移つた時、そこを京都府で坪五十銭で買上げた当時百姓らは大喜びで応じたという時代でしたからね。寄宿舎の賄料が驚く勿れ一日三食でただ九銭！ 平安神宮、岡崎公園、動物園一円の地は勿論、すべて田畑でした。今日なお岡崎の老農の直話によると、今の公園のへんへ野良仕事に出て夕方になると、その古塚のかげから怪しい呼び声があるので、皆恐れて日暮れにならぬ内に早く引揚げて帰つたものです。

阪口は、東京帝国大学に在学した期間などを除いて、「岡崎聖護院方面」で暮らした。大正一四年の人名録⁴⁷⁾には、住所は「岡崎北御所ノ町」とある。記載されている諸事実が、四〇年間のうちのどの時期のことかは峻別しづらいが、第三高等中学校のころのことが中心的に記述されているようである。

「東西のあぜ路が十字を成し」ているとは、田圃が広がっていることを意味する。八ッ橋屋から黒谷に向かう「本通り」は、「歯抜けの状態」すなわち複数の家屋が不連続に道路沿いには立地していた。熊野神社や聖護院などの周辺では、都市化が始まっていたのであった。同時に農業的な土地利用が顕著で、「大学病院前の辺り」は「なすやかぼちゃ畑」であり、「平安神宮、岡崎公園、動物園一円の地は勿論、すべて田畑」であった。

なお、「古塚のかげから怪しい呼び声」が何であったのか、筆者には見当がつかない。

第二節 中澤良夫の叙述

吉田における京都帝国大学の創設は、吉田とその周辺にとどまらず、京都御苑の北に位置する塔之段にも影響を与えた。

『京とところどころ』に載る京都帝国大学工学部教授・中澤良夫（一八八三～一九六六）の叙述を用いることにする。なお、①～④の番号は筆者による。

中澤は、明治三九年に東京帝国大学工科大学応用化学科を卒業し、九州帝国大学を経て、京都帝国大学工学部教授となった。⁴⁸⁾

【中澤良夫（抜粋）⁴⁹⁾

塔之段

京大教授の巢窟

昔ながらの別天地

まるで八幡の藪しらず

① 塔之段は京の別天地である。南は御所、北は鞍馬口、東は寺町、西は相国寺に至る広からぬこの一廓は社会文化から置いてけぼりを食った形で、電車も通らず、市区改正にも与からず、昔ながらの細道のしかも東西の貫通道路は上立売、わずか一間半ばかりの通りがただ一本という有様である。

② 円タク運転手もどこから入っていいか知らない者が八幡の藪知らずであるが、これも元が藪だからやむを得ないかも知れない。何しろ藪の下町という名も残っている通り、昔は一面相国寺から続いた藪で、明治三十年頃には狐狸も出没した。

③ この浮世離れた場所に目をつけたのは村岡範為博士で、今の小川琢治博士郎を営んだのであるが、これは明治三十年頃であつたろう。それから水野敏之丞博士をはじめ、父の岩太博士もこの地に家を相し、その後というものはわれもわれもと集つて、いつの間にか京大教授の巢窟と化した。今では山田法、小西文、松村三学部長初め西宮本、三浦、志田、末廣、榊、桑原、石野、小川、松井、吉田、瀧山、鈴木（虎）、元書記官の中川小十郎等二十氏に近い学者がとぐろを巻いている。一言にしていえば「竹藪変じて学者街^{がくしやまち}」となったもので、これだけ教授が集まっている場所は、世界広しと雖も京の塔之段の外にはあるまい。

④ 街に遠く、電車で遠いので学者の住居には持つて来いであるが、名物の数も成安女子学院等が出来て愈々ほろび、今では学生相手の店も出来、小吉田というほどになっている。

塔之段は、鞍馬口、寺町、御所、相国寺で囲われた範囲で、相国寺にかつて存在した塔の関わりでつけられた地名である。②にある「八幡の藪知らず」の「八幡」とは千葉県市川市八幡のことで、ここにある藪に入ると、「再び出ることができぬとか、祟りがあるとかいわれる。転じて、出口のわからないこと、迷うことなど」のたとえとして用いられる⁵⁰。要するに、道路が整備されていないことを意味している。

「昔は一面相国寺から続いた藪」とある。この「昔」は自らの記憶に基づくものであろう。「藪」には、竹、雑木、雑草などが繁茂していた。明治三〇年頃、つまり著者が十五六歳の頃には、狐や狸があらわれた。そこに「京大教授の巣窟」と言えるほど多数の教授が住んでいたのであった。竹藪から「学者街」へと変化したのである。しかしその後にも変化は続いている。成安女子学院などができて、「学生相手の店」もできた。その状況を「小吉田」と著者は表現している。いうまでもなく、学生相手の店舗が集積する吉田を踏まえてのことである。

居住する京大教授に続いて「元書記官の中川小十郎」の名がある。昭和三年ころ、教授ではないものの、京都帝国大学の書記官に二度も就いた中川は、京都帝大関係者の間では、一目置かれる存在であったことは確かである。なお、中川小十郎の旧宅「白雲荘」は現存している。

第六章 おわりに

農地を潰して尾張藩吉田屋敷ができ、そのほとんどが廃却されて後に、大阪から第三高等学校が移転してきた。第三高等学校に改称後に、同校は煉瓦造の校舎を含む全敷地を京都帝国大学に譲渡し、みずからは南接する敷地に移転した。幕末からの変化をみると、京都帝国大学は三つ目の施設であった。これらに共通しているのは、正面が南であったという点である。

中川小十郎が見たのは、折田彦市が中心的に創出した第三高等学校の景観である。折田は本館を教室棟として使用し、校長室・事務室などを別棟に入れたが、京都帝国大学の総長室は、本館一階の西端部にあり、その東隣に書記官の執務室があったようである。

第三高等学校がこの地に移転してからの土地利用と景観の変化に関して、京都帝国大学教授の阪口昂の回想文をもとに、農業的な土地利用が徐々に都市化していく様をつぶさに捉えることができた。

鴨東、とくに吉田から岡崎までの領域が、第三高等学校と京都帝国大学によって大きく変えられたのである。それは第三高等学校を、衣笠山の麓ではなく鴨東に誘致した北垣国道の決断から始まったといえるかもしれない。森有礼もそれを認めていた。しかし、その影響は、鴨川より西の塔之段にも及んでいたのであった。

同志社・立命館・京都府立医科大学は、京都御所周辺の藩邸跡と御旅所跡、そして宮家屋敷跡から始まったという事実、龍谷が坊官・下間家屋敷跡から、大谷が高倉道場から始まったという事実などと比較すると、もとをたどれば藩邸跡であったとはいえ、京都帝国大学はそれらとはまったく異質の国家の学術政策で創出された。いいかえれば、国家主導型のキャンパス創造であった。

注

- (1) ①河島一仁「大学と旧制高校の立地で考える近代京都の地理―私立4大学と三高・帝大―」、立命館地理学、第一七号、二〇〇五、一三二―一三九頁。
 - ②河島一仁「京都における大学の歴史地理―京都御所の周辺地域における変化―」、立命館文学、第六四五号、二〇一六、二二〇―二二二頁。
 - (2) 鎌田道隆「倒幕と京都町人」、京都市編『京都の歴史七 維新の激動』、芸書林、一九七四、二六四―二七三頁。
 - (3) 岩生成一監修『京都御役所向大概覚書 下巻』清文堂、一九七三、四一二頁。
 - (4) 岩生成一監修『京都御役所向大概覚書 上巻』清文堂、一九七三、一三五―一四六頁。
 - (5) 京都市編『京都の歴史 七 維新の激動』、芸書林、一九七四、二六七頁。
 - (6) 早川純三郎編『東西紀聞 第二』、日本史籍協会、大正六年。
 - (7) 後藤真一「尾張藩京都屋敷とその役職者たち」、岸野俊彦編『尾張藩社会の総合研究 五』清文堂、二〇一二、一九九―二一七頁。
 - (8) 「京町絵図」、御用書林村上勘兵衛刊、明治二已年御改正、木版彩色刷、明治二(一八六九)年、出典『慶長 昭和 京都地図集成 一六一(慶長一六)―一九四〇(昭和一五)年』、柏書房、一九九四。
 - (9) 荒神橋に関して、下中邦彦編『日本歴史地名大系第二七巻 京都市の地名』、平凡社、一九七九、五四六頁には「現在は荒神口と呼ばれるが、吉田口・今道口、また志賀道口ともいう。だが近世末まで恒久的な橋はなく、仮橋程度だったので重い牛車の渡橋は禁じられ、それらはすべて河原へ下りたので、その車道が今も残っている」と記されている。
 - (10) 京都大学百年史編集委員会『京都大学百年史 総説編』、財団法人 京都大学後援会、一九九八、七九七頁。
 - (11) 前掲(10)には九四六が掲載されている。七九九頁。
 - (12) 後藤真一「京阪地域と尾張藩」、岸野俊彦編『尾張藩社会の総合研究』清文堂、二〇〇一、三〇九―三三四頁。
 - (13) 前掲(7)と同じ。後藤真一氏は、「徳川家御住居沿革調書」を根拠にしている。
 - (14) 『京都府地誌 愛宕郡 村誌二』。書誌情報に関しては、次の文献に詳述がある。
- 京都府立総合資料館歴史資料課編『京都府立総合資料館所蔵 改訂増補文書解題』、京都府立総合資料館、一九九三、八四―八五頁。
- (15) 公田蔵「明治前期の数学教育―東京大学予備門と文部省直轄大阪中学校の事例―」、数学教育史研究、第六巻、二〇〇六、一四―一五頁。
 - (16) 神陵史編集委員会編『神陵史―第三高等学校八十年史―』、一九八〇、三高同窓会、二五一―二五三頁。同書は大阪朝日新聞の記事を引用しているが、誤字が散見される。
 - (17) 「大阪朝日新聞」、明治十九年二月二日、第一面。
 - (18) 「大阪朝日新聞」、明治十九年十月十日、第一面。
 - (19) 「大阪朝日新聞」、明治二十年一月五日、第一面。
 - (20) 衣笠山麓には薩摩藩の調練場や火薬庫が位置していた。
 - (21) 前掲(10)八〇―一八〇二頁、八〇頁。
 - (22) 京都大学大学院文学研究科 附属文化遺産学・人文知連携センター編集・発行「京都大学総合博物館 二〇二一年度特別展・文化財発掘Ⅷリーフレット」、二〇二二、七頁。
 - (23) 佐々政一「過去之吉田村」、「壬辰会雑誌」、第六号、一八九二、十一頁。
 - (24) 前掲(10)八〇三頁。中川小十郎による立命館大学と立命館日満高等工学校でも、正門は南を向いていた。これらは偶然の一致であろうか。
 - (25) 宮本雅明「日本の大学キャンパス成立史」、九州大学出版会、一九八九、一〇―一一頁。宮本雅明氏は「本館を教室に充て、事務所を別棟として脇に配したプランは、主として三高と五高の独自の教育方針から生まれたものといえる」と述べ、大阪での大学分校であった当時も、また京都帝国大学にキャンパスを譲って南隣に移転して木造校舎になったときも本館に教室を配しており、それは明治三年以来の方針であった、と指摘している。
 - (26) 折田彦市の理念が継承されていたということであろう。
 - (27) 京都大学百年史編集委員会編『京都大学百年史 総説編』、財団法人 京都大学後援会、一九九八、一一一頁。
 - (28) 神陵史編集委員会編『神陵史―第三高等学校八十年史―』、三高同窓会、一九八〇、四一八頁。
 - (29) 前掲(27)一一二頁。
 - (30) 明治文化資料叢書刊行会編『明治文化資料叢書 第八巻 教育編』、風間書房、一九六一、二二二頁。
 - (31) 松本皎「学園創立者中川小十郎の事績抄―中川小十郎先生五十回忌(一九九三年十月)を迎えて―」、立命館百年史紀要、第二号、一九九四、二二八―二三三頁。

- (32) 京都大学百年史編集委員会編『京都大学百年史 資料編』、財団法人京都大学後援会、一九九八年、三頁。
- (33) 前掲(26)一二四頁。
- (34) 『京都帝国大学史』、京都帝国大学、一九四三、二二五頁。
- (35) ①岩井忠熊『学問・歴史・京都』、かもがわ出版、一九八八、一一三頁。
②松本皎「中川小十郎と京都帝国大学設立事情および京都法政学校の創立」、立命館百年史紀要、第一号、一九九三、一一八頁。
- (36) ①前掲(35)一一三―一一四頁。
②前掲(31)二三五―二三六頁。
- (37) 岡本幸雄「近世丹波馬路村における「両苗郷土」の存在形態(一)」、立命館経済学、第五卷第五号、一九五六、二二―二三三頁。
- (38) 岡本幸雄「近世郷土の存在形態(上)―丹波馬路村「両苗郷土」の経済的基盤と村方支配―」、立命館経済学、第六卷第五号、一九五七、一一―一一七頁。
- (39) 岡本幸雄「幕末・明治維新における郷土の政治的運動の展開―旗本領丹波馬路両苗郷土について―」、立命館経済学、第九卷第二号、一九六〇、三九―六三頁。後に、中川小十郎は禁衛隊を組織し、「禁衛隊主義」を標榜した。それらの淵源は馬路両苗郷土である、と見なせるのであろうか。
- (40) 岩井忠熊『西園寺公望』、岩波新書、二〇〇三、十一―十三頁。
- (41) 多田好問編『岩倉公實記 中巻』、原書房、一九六八、二三五―二三六頁。
- (42) 関順也「丹波の郷土仲間「弓者連中」について」、社会経済史学、第十九卷第二・三号、一九五三、一〇九―一一七頁。
- (43) 岡本幸雄「丹波国馬路帶刀郷土覚書―人見中川『両苗』郷土の存在形態と政治的運動―」、海鳥社、二〇一四、一一三頁。
- (44) 岩井武俊編『京とどころ』、金尾文淵堂、一九二八。
- (45) 前掲(34)七一―七二頁。
- (46) 前掲(44)二二―二三頁。
- (47) 『明治大正昭和 京都人名録』、日本図書センター、一九八九、一二九頁。
- (48) 『人事興信録』データベース <https://jahis.law.nagoya-u.ac.jp/who/docs/w108-1586> (閲覧日二〇二五年六月二十九日) (第8版「昭和3 (1928) 年7月」の情報)
- (49) 前掲(44)二二―二七頁。
- (50) 新村出編『広辞苑 第二版補訂版』、岩波書店、一九七九、二二四〇頁。

(本学名誉教授)